



分科会 9 感染対策に求められる薬剤師の役割

W-09-03 保険薬局が関わる地域・在宅での感染対策

みずの まさこ
水野 正子

NPO 法人 愛知県褥瘡ケアを考える会 代表

NPO 愛知県褥瘡ケアを考える会は 2004 年に「在宅で使える感染症の予防と対策！」という冊子を発行している。これを作成しようと考えたのは、当時、地域で消毒薬の選択、濃度、目的が根拠を持たず実によく加減に行われている事例を続けて経験したことによるものだった。また、MRSA を持つ男性高齢者の退院に当たり、お嫁さんが「居室・衣服・食器の消毒薬を買いたい」と来店され、消毒は必要がないことを説明するもただひたすら怖がるばかりで、何か説明のツールがあると良いと思ったことにもよる。この高齢者の身になって考えれば、家族から隔離され、自分のものが徹底的に消毒されるのは、一種の人権問題である。私たちは消毒薬を適正に使用することが、地域や患者の健康維持、望む生活に重要な要素であると判断し、誰でもわかりやすく、正しく感染対策ができるマニュアルを作成した。この冊子にはウイルスや細菌別に解説、感染経路、予防方法、接触時の対応、消毒薬の適切な選択、使用できる部位、その濃度、使用方法を載せた。不必要な消毒を行わないように、通常の洗浄でよい場合はその旨を明記し、感染者が不当な隔離や消毒により孤立しないようにした。

それから数年が過ぎたが、状況が好転しているようには思えない。訪問する先々でカテーテルの消毒法が異なり、カテーテル自体が使い捨てであったり、継続して何度も使われていたり、訪問してくる医療や介護スタッフの手洗いすら十分でない場合が散見される。地域の高齢者が利用する介護保険のデイサービスで、入浴後に施設の電気カミソリでひげそりをし、使用後に血液感染に無効な消毒液に浸しているのを見るのもまれではない。在宅医療の現場では、人工呼吸器・気管切開・中心静脈栄養・留置カテーテル・導尿など医療依存度が高い患者が増えている。訪問先で看護師やヘルパーから消毒についての質問を受けることも多くなっている。さらに薬局業務としても、輸液調剤など厳密な無菌操作、感染対策を意識しなければならない分野が増えている。このようなことから、地域にも病院と同じように感染対策をきちんと行える体制が必要であると考え、患者ごとに関わる事業所や職種が異なっているため、感染対策委員会を立ち上げ、機能させることは大変難しい。まずは保険薬局がイニシアティブを取って、現状を打開し、地域・在宅での感染対策に向かいあう必要があると考える。